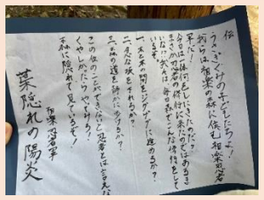
体感する力

各主体の取組事例に対する定性的評価　ステップアップ・ワークシート（案）

中間評価（案）
資料５

取組事例の名称等
蒲郡あさひこ幼稚園

ねらい	園児の状況	成果指標
“生きる力”を育てるために、自然体験等を活用した五感を使った保育を行う。	各家庭における園児の自然体験の状況は様々である。 満３歳児から入園可能である。	五感を使った保育ができたか。

取組の内容	工夫	園児や関係者の反応	学習の効果＆主に育まれる力
１　園内での保育 ①日常保育 ②「あさひこ農園」での野菜作り。 ③園のお祭り	①子ども自ら何度も試し、確かめ、試行錯誤を繰り返しながら育っていけるような環境作りをし、自然豊かな園庭での遊び、廃材を使った製作活動等、創造力や自己課題を見つける力を育てる。教職員においては、情報共有タイムを毎日設け、園内外の研修にも積極的に参加。 ②苗付けから、草取り、収穫まで子どもたちが行い食育につなげる。 ③園で開催するお祭りでは、企画、準備、運営を年長児が主体的に実施できるよう支える。 見守り　本物体験　成果実感	①自由に遊ぶのって楽しい！友だち、先生大好き！ ②野菜が苦手な子も自ら育てた野菜は食べることができた。 ③友だちと協力して一つのものを作り上げる経験から達成感を感じることができた。 	お祭りの準備として、看板やメニュー表を作成するため、文字を書こうとしたり、お客さんの人数に合わせて商品の数を計算したりと、遊びの中で必要に駆られ、自ら方法を考えたり、友だちと協力し合いながら文字や数字に興味を持ち、使うことができた。 体感・理解・共働・探究・活用
２　自然教育 ①園児が自然とふれあう機会として、３年間にわたり月１回ごとに近隣の里山で園外保育を実施。 ②年中は「忍者修行」、年長は「季節の山の絵」を通して自然体験を実施。	①同じ場所に何度も出かけることで、動植物に触れ、五感を通して豊かな季節感を育む。大人が遊びを用意しすぎないようにし、子どもの発想・発見を大切にした活動を実施。 ②「忍者修行」では、里山に住んでいる忍者からの手紙による「修行」という名のチャレンジングな遊びを通して、達成感を味わえるように工夫。年長は同じ場所で季節ごとに山の絵を描く。目で見たものだけでなく、音・匂い・空気等、五感を通して感じたものを絵に描いていくことによって表現力を養う。 本物体験　ゲーム化	①お山の中にはおもしろいものがいっぱい！あれもこれもやってみたい、さわってみたい！ ②同じ場所なのに、季節によって全然違う絵ができた！春はお花がいっぱい、秋は葉っぱが赤や黄色になってる！  	同じ場所に何度も出かけることで、五感を使って季節の変化を感じとることができた。さらに、年長になると、感じたことを絵として表現することができた。 体感・理解・共働・探究・活用
３　関係者との連携・協働 ①「お父さんウィーク」として、父親が自由に保育に参加できる日を設定。 ②ブログ、SNS 等で毎日発信。 ③地域の方と園児が、昔の遊びを通して交流。	①「お父さんウィーク」は、父親にも幼稚園での子どもの様子を知ってもらうために実施。幼稚園と家庭をつなぐとともに、地域で子育ての楽しさを共有。 ②保育ドキュメンテーションにより、保護者に保育内容を共有。 ③地域の高齢者が、子どもに昔の遊びを伝えることで、世代を超えて交流。 見守り　本物体験　共感・納得	①家庭と園での様子が違うことに驚き。家ではお片付けしないのに園ではしっかりしている。社会性が育っていることを実感。 ②園での様子がよく分かる。 ③子どもたちとふれあうことで元気をもらえました！ 	幼稚園での様子を「お父さんウィーク」「保育ドキュメンテーション」等で積極的に共有することで、保護者や地域の方と良好な関係を築くことができた。 体感・理解・共働・探究・活用

■蒲郡あさひこ幼稚園

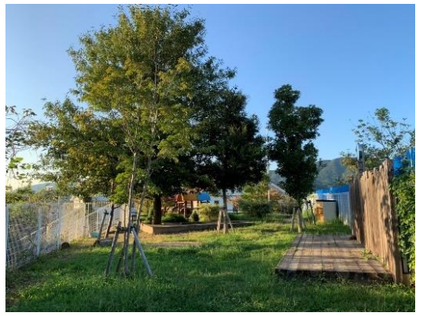
・自然体験を大切にした保育を実施している。

・園庭には「砂場」「動物舎」「かまど」、園庭の奥には斜面を利用した「あさひこランド」という、芝滑り、虫捕り等ができるエリアがあり、季節の虫や草花が遊び心を誘う。

・他にも「あさひこガーデン」というエリアには、トキワヤマボウシ等食べられる実のなる木が植えてあり、子どもたちにとって「癒しの森」となっている。さらに食育の一環として園児が季節の野菜を育てている「あさひこ農園」がある。育てた野菜はそのまま食べたり、干し野菜にしておやつで食べたりしている。

・また、「火」を使う体験を大切にしており、収穫した野菜を蒸篭で蒸すために、かまどで薪をくべ、火の便利さ・危険さ等を体験から学べるような環境を用意している。

かまど



あさひこガーデン

園児の変容

【先生のコメント】

・年中の「忍者修行」では、長所を互いに伸ばすような工夫として、それぞれの子の修行の成果をクラス全体で共有することで、一人一人の良いところを認め合えるようになった。全体の場で発言をすることに抵抗感があった子も、自分の意見を言えるようになり自信がついた。また視野が広がり、友だちの意見に耳を傾けようとする姿も見られるようになってきた。

【保護者のコメント】

・保育者が子どもに対して、自己肯定感を持てるような声かけをしてくれたり、全面的に受容してくれることで、子ども自身にも優しさや思いやりの心が育っている。

・虫が苦手で見るのも嫌と言っていた我が子が、園生活の中で虫への抵抗感が薄れ、「虫見つけたよ」と報告してくれるようになり、人と生き物とのつながりを感じることができるようになってきた。

・「お父さんウィーク」で経験した園での遊びを「家でもやってみよう」ということになり、我が子との関わりがさらに増えた。

・年中、年長と園で過ごすことによって、言葉での表現に広がりができ、自己主張ができるようになった。

成果と課題

【成果】

・五感を使った自然体験を通して、とことんのめりこんで遊ぶことにより、工夫する力、創造力、自己課題を見つける力が育った。

・子どもの主体性を重視した保育が、小学校入学後、指示待ちではなく状況に応じて自分で判断して行動する児童の姿勢の形成につなげることができた。

・人や自然と関わりながら過ごしていくことにより、「ぼく、わたしって素敵」という自己肯定感のベースを作ることができた。

【課題等】

・本園での取組をさらに幅広く伝え、地域全体で温かい子育てをしていけるようにする。
また、小学校教諭と交流をし、スムーズに就学できるよう、子どもの育ちを共有する。

・継続して注意していく点として、自然体験を行う上での安全管理が大切なので、環境の確認や、園外保育の下見等をこまめに行い、危険がないように気をつけていく。

体感する力、理解する力、共働する力

各主体の取組事例に対する定性的評価　ステップアップ・ワークシート（案）

取組事例の名称等

犬山市立羽黒小学校
（第５学年 総合的な学習の時間
お米から食を見つめよう）

ねらい

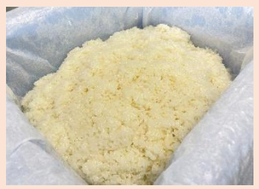
米作り体験を通して、地域の環境や食の大切さを理解するとともに、地域の方と一緒に活動することで、地域社会との協働を学ぶ。

学習者の状況

米については、教科書で学んでおり知識はあるが、実際に米作りを体験したことがない児童がほとんどである。

成果指標

米作りを通して、水田をとりまく環境や食の大切さを理解するとともに、地域の方と一緒に取り組むことで、地域社会との協働を学ぶことができたか。

取組の内容	工夫	学習者の反応	学習の効果＆主に育まれる力
１　米作りについて学ぶ（導入）	・社会科の授業でも取り扱った米という身近なものをテーマとすることで、児童の学習意欲を高めるように展開。 ・米作りから、自然環境、歴史、食などの多くの知識を得られるように、また、SDGs に関連づけた内容にするよう、授業構成を工夫。 ・米作りの工程にはどのような意味があるのかを考え、作業の流れを理解しながら学習。 ・電子黒板などを利用して、視覚的に米作りが学べるように工夫。 共感・納得　見通しOK	・米作りについて知っていることを児童同士で共有すると、新たな気づきがあり、驚きの声が上がった。	・自然環境、歴史、食などに関する知識同士を結び付けることで、横断的な学びとすることができた。
２　米作り体験（体験） ・肥振り（４月） ・田植え（５月） ・稲刈り（１０月） ・脱穀（１０月）	・学校近くの学習田で、羽黒コミュニティの方が、田植えの準備や稲の植え方をレクチャー。 ・羽黒コミュニティの方の指導を受けながら、鎌での刈り取り、刈り取った稲を束ね、稲架（はさ）掛けする作業や、農家が使っているバインダーによる刈り取りも体験。 ・稲架（はさ）掛けし乾燥させた稲を脱穀。羽黒コミュニティの方が昔ながらの脱穀の道具も紹介しながら、米作りの歴史も学習。 驚き・感動　本物体験	・自らの手で植えることができ、楽しそうな様子であった。 ・稲刈り、脱穀により米作りを体験した後の児童には、達成感に満ちた笑顔があふれていた。 	・普段食べているお米がどのように生産されているか、田植えから脱穀までの一連の作業を通した実体験をもって学習することができた。
３　発表会（まとめ） １月に米作りを通して学んだことを発表する場を設けている。	・自分たちが体験した米作りの工程を振り返り、苦労したことや驚いたことなどを発表。 ・体験を通じて感じたことや気づいたことを積極的に発信。 共感・納得　成果実感	・相手に分かりやすいように、言葉や図を工夫して発表する。  炊き上がったお米	・発表の手順や内容を考え準備する活動を通して、自分たちが経験した米作りを再度振り返り、学習した内容を深めることができた。

4　関係者との連携・協働
・羽黒コミュニティ
・保護者

・羽黒コミュニティのもつ豊富な知識・経験による米作りは、児童が普段の授業ではできない、貴重な体験。
お世話になった羽黒コミュニティの方を招待した感謝の会を開催し、世代を超えた交流の場を設定。
・保護者も米作り体験に参加することで、普段の学校での様子を知ることができ、家庭での振り返りに活用。

本物体験　見守り　成果実感

・保護者とは異なる年代の人から米作りを直接指導していただき、安心して作業を体感することができた。
・保護者が見守り、適度に手助けも得られたため、普段以上に張り切って体験に参加できていた。

・学校だけではできない体験を、地域との連携・共働により実現することで、広がりをもった学習にすることができた。
・学校の取組を家庭と共有し、家庭での振り返りに活用することで、家庭内での学び合いにつなげることができた。

■犬山市立羽黒小学校（第５学年 総合的な学習の時間 お米から食を見つめよう）

・学校教育目標に「自主」「創造」「協力」を掲げている。
・第５学年の総合的な学習の時間では、児童の主体的学習や地域、世代間の学び合いを促していくために、羽黒コミュニティという地域の方の協力を得て、約 20 年にわたり米作り体験を実施している。
・総合の発表では、米の学習からさらに広げて、「食」のテーマで調べ学習を行った。
・身近な給食や、日本の食事・世界の食事など、様々なテーマから、自分が興味関心のあることについて調べ、スライドなどを使用して人に伝える学習を行った。

４月の肥振りで、土に養分を与えてから、５月に田植えを行った。コミュニティの方の指導で、米作りのための段取りや準備を理解し、作業体験することができた。

米の収穫後に、お世話になったコミュニティの方に感謝の会を開き、世代を超えて、会話やゲームを楽しんだ。
学校給食に、収穫米を使用し、全校児童に食べてもらった。

学習者の変容

【児童のコメント】
・自分が普段食べているお米が、こんなに手間をかけて作られていることを知り、ありがたいと感じた。
・脱穀では、千歯こきや輪転機など、昔使っていた道具を体感でき、作業の大変さを実感できた。

【先生のコメント】
・手での田植えや、いろいろな道具を使っての脱穀など、普段経験できない活動によって、子どもたちの学びがより深まったと感じる。
・昔の人の苦労、米作りの楽しさなど、体験を通して学び、食材や、作る方への感謝の気持ちが高まった。

【保護者のコメント】
・子どもと一緒に米作り体験に参加することで、分かったこと、気づいたことを子どもと共有することができた。
・泥の中に素足をつけ作業したり、笑顔で友達と汗をかいてがんばったり、普段は家では見ることのできない子どもの姿を見ることができた。

【羽黒コミュニティのコメント】
・米作りを通して児童と交流することで、身近な地域について知ってもらうことができた。
・地域の子どもたちとふれ合い、感謝されることで自分たちも力をもらった気がする。

成果と課題

【成果】
・米作りを通して、水田にすむ生きもの、地域の環境を知ることができた。
・自ら収穫したお米を食べることで、お米一粒一粒のありがたみを感じることができ、食育にもつなげることができた。
・地域の方と一緒に実施することで、他者と力を合わせて取り組むことの大切さを理解することができた。

【課題等】
・地域の米作り農家が減少傾向にあり、担い手不足と高齢化に直面している。指導していただく米作りのエキスパートの方も減少しているため、いつまで今の形で続けられるか不安はある。

体感する力、理解する力、共働する力

各主体の取組事例に対する定性的評価　ステップアップ・ワークシート（案）

取組事例の名称等

豊田市立猿投台中学校
（第１学年 総合的な学習の時間
菜の花プロジェクト）

ねらい

菜の花プロジェクトを通して、地域貢献活動に参加し、地域の一員としての自覚を高める。

環境問題や SDGs について学ぶことで、持続可能な社会を作り上げるために必要な力を身に付けさせる。

学習者の状況

環境問題や SDGs に関する興味・関心の程度は様々である。

成果指標

菜の花プロジェクトを通して、地域貢献活動に参加し、地域の一員としての自覚を高めることができたか。

環境問題や SDGs について学ぶことで、持続可能な社会を作り上げるために必要な力を身に付けることができたか。

■取組の内容（学校）

工夫

学習者の反応

学習の効果＆主に育まれる力

１　導入、講義、体験学習

①オリエンテーション、種まき
②講話、ろうそく作り
③BDF 説明、廃油石けんによる洗濯体験、トラクターとの綱引き、菜の花の手入れ

①持続可能な社会のためにできることを具体化するために、身近な菜の花をテーマに設定。菜の花プロジェクトを通して、NPO を始めとする地域の方との交流を深め、地域社会との関わりを再認識。

②リサイクルやごみの減量も踏まえた実習として、ろうそく作りを行い、環境問題を楽しく学べるよう工夫。

③育てた菜の花を卒業式で飾ることで、保護者等を始めとする関係者へ菜の花プロジェクトを周知。

本物体験　驚き・感動　ゲーム化

①自分で菜の花を育てること、プロジェクトを通して環境問題を学べることを楽しみにしている様子であった。

②ろうそくの作り方を習ったので、家の廃油を再利用して作ってみた。

③燃料としてBDF を使ったトラクターとの綱引きが印象的だった。排気ガスも天ぷらのようなにおいで美味しそうだった。

・家でも使用済みの廃油からろうそくを作ったというように、実践しやすい内容を題材とすることで、リサイクルやゴミの減量を家庭でも考えるきっかけとなった。
・菜の花プロジェクトを通して取り組んできたものが、教科を横断した学習や、生活と深く関わっていることを理解することができた。

２　まとめ

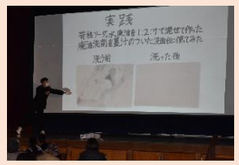
①発表会（校内）
②発表会（校外）

①菜の花プロジェクトを通して学び得た知識を深めるため、校内で発表会を開催。自分の考えをまとめ、他者へ伝えるために分かりやすい表現を工夫する過程で、新たな気づきを得られるよう促す。

②学年代表が、菜の花楽習会で発表を行う。校外での発表ができることで、生徒の意欲を高める。

成果実感

①級友の発表を聞き、自身が調べていただけでは知りえなかったことも知ることができ、さらに環境問題について理解を深めることができた。



②自分たちの活動を、様々な方に発表するために発表練習を行った。何度も練習し発表することで、自信を持って発表することができた。

・生徒自身が興味を持った環境問題を探求し、その問題の解決策を実践することで、より自分事としてその問題を捉えることができた。
・他者の発表を聞くことで、様々な環境問題について理解を深めることができた。

■取組の内容（関係者）

NPO 法人豊田・加茂菜の花プロジェクト、
太田油脂（株）等の関係者との連携

工夫

・生徒の興味を引き出すために、五感を使った体験を提供できるように学校と調整。

・菜種を搾油機で絞った後のしぼりかす、菜種を使った醤油等の試食や、BDF の馬力を体験するためにトラクターと綱引きなど、生徒の興味を引き出すように工夫。

本物体験　驚き・感動　ゲーム化

学習者の反応

・菜種が油になり、利用され、BDF にリサイクルされる一連の流れを見ることで、菜の花プロジェクトへの理解が深まった様子であった。

・トラクターとの綱引きというゲーム要素が生徒の記憶に残った様子であった。

学習の効果＆主に育まれる力

・五感を使った体験により、生徒の理解を深めることができた。

・NPO や企業と連携・協働することで、地域社会を意識した学びにつなげることができた。

■豊田市立猿投台中学校（第１学年 総合的な学習の時間　菜の花プロジェクト）

・菜の花プロジェクトを通して、環境問題や SDGs について学ぶことで、持続可能な社会を作り上げるために必要な力を身に付けさせることを目的として、NPO、企業等の関係者と連携・協働により、長年にわたり実施している。

廃油を原料にした石鹸を使用して洗濯体験をする様子

探究活動
学級発表会の様子

学習者の変容

【生徒のコメント】
・菜の花は、様々なものへと形を変えながら循環させることができ、地球温暖化を防止できることが分かった。
・廃油を使い石鹸やろうそくを作れるということを知り、限りある資源を有効に使うことの大切さが分かった。
・今後は廃油を捨てるのではなく、リサイクルをしていきたい。また家族や周りの人にも菜の花プロジェクトで学んだことを広げていきたい。

【先生のコメント】
・体験活動を行うことにより、自分事として捉えながら活動することができ、環境問題への意識が以前よりも高まった。

【関係者のコメント】
・自分たちの活動をどれだけ理解してもらえているのか知りたいと思っていたが、先生のフォローもあり、生徒に話した内容をしっかり理解してくれていることが確認でき、とても有意義だった。

成果と課題

【成果】
・菜の花プロジェクトを通して、学校、地域の関係者が連携・協働し、充実した体験活動を実施することで、地域の特色を活かした学びにつなげることができた。
・環境問題や SDGs について多面的に捉え、知識を結びつけていくことで、横断的な学びとすることができた。

【課題等】
・探究活動時に行った、環境問題を解決するための実践を、継続的に行うことができていない。
・生徒たちが育てた菜の花を、卒業式や入学式で飾ることで、会場を華やかに彩り、菜の花プロジェクトの周知を図っていく。

探究する力、共働する力

各主体の取組事例に対する定性的評価　ステップアップ・ワークシート（案）

取組事例の名称等

愛知県立安城高等学校
（普通科全学年 総合的な探究の時間
ＡＢＰ ＳＤＧｓ探究学習）
※ＡＢＰは安城高校における
「総合的な探究の時間」の呼称
ANKO Bridge Project

ねらい

安城高校で学ぶ３年間で“社会とともに生きる自分”を目指す。

❶ 主体性・協働性を伸ばし、自ら学びに向かう態度を養う。
❷ 社会に貢献できる自己の在り方・生き方を考える。
❸ 他者との協働活動を通して、道徳性を涵養する。

学習者の状況

第１学年の総合的な探究の時間でＳＤＧｓの概要をクラス単位で探究的に学んでいく。

第２・３学年の同時間で、興味のあるＳＤＧｓのテーマを選択し、ゼミナール形式で深めていく。ゼミナールは地域の企業等がそれぞれアドバイザーとして参加。

成果指標

“社会とともに生きる自分”を目指すことができたか。

❶ 主体性・協働性を高められたか。
❷ 自己の在り方・生き方に気づけたか。
❸ 寛容の精神を涵養できたか。

■取組の内容（学校）

１　ＳＤＧｓの 17 の目標の中から生徒自らテーマを設定

学校の工夫

・第１学年でＳＤＧｓに関して得た知識を活かし、興味・関心を持って探究できるよう、生徒自身がテーマを選択。
・各テーマは、第２・３学年各 20 人の計 40 人からなり、クラス・学年の枠を超えた構成とすることで、生徒同士が学び合いにより、幅広い視点を持てるよう工夫。

共感・納得　見通しOK　見守り

学習者の反応

・第３学年は前年度までの成果を深化させ、後輩を指導しながら関心を一層深められた。
・第２学年は身近な関心の中から具体的な行動案を第３学年とともに検討した。

学習の効果＆主に育まれる力

・第１学年で学んだ全体像から、第２・３学年でさらに興味・関心のあるテーマを選択することで、主体的な学びにつなげることができた。

２　あんじょうＳＤＧｓ共創パートナーとともにＳＤＧｓテーマで探究学習

学校の工夫

・学んだ知識や集めた情報を活用し、具体的な行動に移すことができるように促す。
・あんじょうＳＤＧｓ共創パートナーをアドバイサーとし、体験学習等も取り入れながら、地域社会とのつながりができるよう工夫。
・パートナー企業と対面で検討・振り返りの場を設定し、企業と連携することで、学校と企業の信頼関係を構築。

見守り　本物体験　見通しOK

学習者の反応

・学校の先生と企業担当者の視点がそれぞれ異なり、多角的に検討できるため、アイデアの幅が広がった。
・先輩と一緒にグループワークをすることで、先輩の取り組む姿から探究の仕方について直接参考にすることができた。

学習の効果＆主に育まれる力

・パートナー企業との連携や体験学習により、学習の幅や深まりを生み出すことができた。
・クラス・学年の枠を超えたグループ編成で活動することで、生徒同士の学び合いにつなげることができた。

３　３学年合同の成果発表会

学校の工夫

・成果発表会に向けて、内容を分析することや、発表資料としてまとめることで、学びを深める。
・新たな課題や気づきが得られるよう、互いの発表を聞き合いグループごとの成果を共有することや、企業から直接コメントをもらうように工夫した発表会を開催。
・企業とのやり取りの中から生徒の社会性を育て、キャリア意識を高められるよう工夫。

ゆさぶり　共感・納得　成果実感

学習者の反応

・第１学年はクラスで班別に制作したポスターを体育館の展示し、上級生や企業の方に観覧してもらい、助言をいただいた。
・第２・３学年は、取り組んできたアクションプランについて各ゼミナールより報告し、参加企業からコメントをいただいた。

学習の効果＆主に育まれる力

・上級生の取組を下級生が見ることで、次年度の学びに対し、後輩が見通しを持つことができた。
・一つのゼミ報告に対し、複数の企業から助言を受け、企業目線で社会のリアルを考察できた。

■取組の内容（企業）	企業の工夫	学習者の反応	学習の効果＆主に育まれる力
豊通物流（株） ・あんじょうＳＤＧｓ共創パートナーとして、生徒の学習をサポート ・テーマ　１　貧困をなくそう 　　２　飢餓をゼロに	・生徒の主体性を伸ばすために、新たな気づきを促すような学びの場をサポート。自社とつながりのある団体、担当者の個人的なつながりで、別の企業や大学関係者とゼミナールとを接続し、生徒の学びを膨らませた。 ・積極的に企業の方が来校され、生徒とのセッションを重ねたことで生徒の見方・考え方がより深められた。 ゆさぶり　本物体験　成果実感	・昆虫食について調べていく際に、実際にコオロギパウダーを製造している会社の方が来校されて、セッションをしていると探究が面白く感じた。 ・電話やメールでも、大学の先生とコンタクトを取れた。現地インタビューにも行けて勉強になった。 	・関心ある事柄を追究すると、様々な関連があることに気づき、課題が複雑に絡み合っていることに気づいた。 ・大学や会社が、高校生の学びに協力的であることに感動した。
ニチバン（株） ・あんじょうＳＤＧｓ共創パートナーとして、生徒の学習をサポート ・テーマ　13　気候変動に具体的な対策を	・生徒が主体的に考え、探究することができるよう、実物等を使って生徒の興味・関心を引き出し、具体的なアクションを考察できるようにした。 ・実際の製造工場と教室をオンラインで結んで、日常の製造工程において、工場が徹底している工夫改善の仕組みをリアルに体験することができた。 本物体験　驚き・感動　成果実感	・コロナ禍の当時は、実際に工場に足を運ぶことは難しかったが、工場とオンラインで結ぶことで、よりリアルに感じ取ることができた。 ・教科書では学べない社会の実際の状況を感じ取ることができ、自分には何ができるか考えてみた。 	・学校の外へ視点を向けることで、リアル体験を通して社会の実情をつかみ取ることができる。 ・ネット情報だけの理解に留まらず、社会の動きに一層関心を持てるようになった。

■愛知県立安城高等学校（普通科全学年 総合的な探究の時間 ＡＢＰ ＳＤＧｓ探究学習）

・総合的な探究の時間を“ANKO Bridge Project”（ＡＢＰ）として実施している。令和４年度からは、ＳＤＧｓを手掛かりに、生徒が自ら課題を設定して、仲間と協働し問題解決に向けて考えることを学び、社会貢献を目指す取組として実施している。

・ＡＢＰはＳＤＧｓ探究学習だけでなく、キャリア教育や道徳、情報モラルなども取り扱い、社会に貢献できる人材を目指して取り組んでいる。

・高校生のうちからキャリアに視点を置いて、自らの在り方・生き方を考えられるように学校教育活動全体で学びを進めており、あんじょうＳＤＧｓ共創パートナーとなっている地元企業等 12 社から協力を得て連携するＳＤＧｓ探究学習がその中核となっている。

・ＡＢＰは生徒の主体性や協働性を育て、地域貢献する気持ちを高めることをねらいとし、外部講師を招くことが学校と社会をつなぐチャネルとして機能するように企図している。

・「ただ話を聞いて終わり」とならないように、生徒同士が話し合う場面を確保したり、生徒が発表する時間を保証したりして、生徒の探究心や学び続ける姿勢が安城高校卒業後にも続くように期待している。

学習者の変容

【生徒のコメント】

・世の中で自分が将来どう生きていきたいかをＡＢＰの活動から考えることができた。（３年生）

・ＡＢＰで企業の方と直接話す機会があるのは、世界への視野が広がって、どのような進路を選べばよいか考えるきっかけになった。（２年生）

【先生のコメント】

・普段の授業では見られない生徒の表情を見ることができて、普段の授業の形も再考する機会になった。

【企業のコメント】

・2022（令和４）年度の第２学年が、2023（令和５）年度は第３学年として、グループ内をうまく取りまとめ、リーダーシップを発揮できるようになっていた。

・当初は受動的な様子であったが、回を重ねるごとに、学生側から課題解決に向けた提案があるなど、積極的に活動するようになった。

成果と課題

【成果】

・クラス・学年や教科の枠を超えてＳＤＧｓのテーマに取り組むことで、発展的な活動や課題への意識を高めることができた。

・あんじょうＳＤＧｓ共創パートナーと協働することで、社会との一員として、よりよい社会の実現に向けて主体的に行動することができた。

・時代の流れに敏感になり、学校内で見ている常識以上に世の中の変化が目まぐるしいことに生徒・教師が気づかされた。

【課題等】

・ＳＤＧｓや時代の変化に対応していくための学びとしては有効だが、校内で必要となる他の活動とのバランスを考えると、十分な時間を確保するのが難しい。

・総合的な探究の時間の指導を充実させるために、教員研修の機会も拡充されたい。

体感する力、共働する力

各主体の取組事例に対する定性的評価　ステップアップ・ワークシート（案）

取組事例の名称等

愛知県立みあい特別支援学校 高等部
（農福連携の取組）

ねらい	学習者の状況	成果指標
卒業後の積極的かつ持続的な社会参加を目指し、体験的な学習等により実践力を積み上げ、課題を解決したり個々の手段で思いやりや考えを伝えたりする力を育成する。	生徒一人一人の障害特性は様々である。	卒業後の積極的かつ持続的な社会参加を目指し、体験的な学習等による実践力を積み上げ、課題を解決したり個々の手段で思いやりや考えを伝えたりする力を育成できたか。

取組の内容	工夫	学習者の反応	学習の効果＆主に育まれる力
1　ユニバーサル農園の活用・整備（通年）	・四季を通じた作業の中で、地域の方と共同で季節ごとの野菜を栽培。 ・地域と連携し、世代を超えた交流の場を整えるため、各関係者と定期的にオンライン会議を実施。 ・耕運機の作業では、生徒が地域の方へ操作方法を教えることで、生徒が学んだ知識を活かす機会を設け、学びを深めることや、主体性を引き出すよう工夫。 ・地域の方に生徒の実態を知ってもらうため、構造化、視覚化を取り入れた支援方法の伝達。 ・校内で販売学習を実施。 ・本校の取組を積極的に発信するため、マスメディアに取材を依頼。 本物体験　見守り	・初めてだけど、楽しくお話しながら収穫できた！ ・岡崎市全体で農福連携を盛り上げようと会議全体の熱量の高まりが感じられた。 ・初めての体験で、優しく丁寧に教えてもらい嬉しかったです。（地域の方） ・去年に比べてたくさん野菜が育っている！ ・自分たちが育てた野菜を売ることの満足感や充実感を感じていた。 ・取材は緊張したけど、新聞に載って嬉しかった！ 	・関係者との定期的な報告会の開催による学校運営体制を整えることで、生徒の地域との交流の幅が広がり、社会性が育まれた。 ・新聞やテレビ、関係機関の SNS 等で本校の取組を発信してもらうことで、本校の教育活動の理解とアピールに有効的であり、取組を知った方や企業から新しい活動や、励ましの手紙や電話、製作に必要な材料をいただくこともあり、さらなる学びにつなげることができた。 体感　理解　共働　探究　活用
2　フラワーアレンジメント制作（通年）	・制作したフラワーアレンジメントを岡崎市社会福祉協議会へ生徒自らが納品に行くことで、地域の方とコミュニケーションを図る機会を設定。 ・フラワーアレンジメント講師からの、主となる色を決める、グリーンを活用するなどの具体的なアドバイス。 ・生徒同士が対話し、よりよいアイデアを出し合えるような環境づくり。 本物体験　見守り	・講師からのアドバイスを取り入れてフラワーアレンジメント作品に、生徒自身も満足している様子で、笑顔が見られた。 ・緊張していたが、制作した思いを伝えるなど感情を込めて納品していた。 	・講師からのアドバイスにより、作品の完成度が高まり、その成果を生徒同士や納品時に共有することで、達成感を得て、次回の制作に活かすことができた。 体感　理解　共働　探究　活用
3　県立農業大学校との連携（９～３月）	・同校の近隣にある愛知県立農業大学校と、校外作業学習（野菜の栽培、収穫等）で連携を行うことで、生徒の経験を広げる機会を設定。 本物体験　見守り	・状態のよい野菜の見分け方を学びました！ ・愛情を込めて育てると、野菜も大きく成長すると教えてくれました！ 	・栽培方法や収穫するタイミングなど、専門性の高い知識を学ぶことができた。 ・普段関わりのない方とも、農業を通じて交流することで会話が弾み、社会性が身に付いた。 体感　理解　共働　探究　活用

■愛知県立みあい特別支援学校 高等部（農福連携の取組）

・岡崎市と幸田町を通学区域とする知的障害の児童・生徒を対象にしている学校。
・高等部の作業学習の一環として、2022（令和４）年度から本格的に活動。園芸班を中心に農福連携に携わっている。
・地域とのつながりを大切にし、岡崎市社会福祉協議会、柴久園、JA あいち三河を始めとする各関係者との連携を図っている。
・地域だけでなく、本校小学部、中学部にも農業体験を呼びかけ、校内の活性化を図っている。

法性寺ねぎの苗植え体験をおかざき農遊会から指導を受けている様子

市内のキッチンカーと提携し、収穫したさつまいもを調理してもらい、収穫に関わった関係機関や本校児童を呼んで喫食体験を行っている様子

学習者の変容

【生徒のコメント】
・僕たちが一生懸命育てたさつまいもを、こんなにも美味しく調理してもらい、みんなに喜んでもらえてすごく嬉しかったです。
・私たちが作ったフラワーアレンジメントを飾ってもらえて嬉しいです。

【先生のコメント】
・地域の方々との関わりの中で、質問で聞かれたことだけを答えていた生徒が、自らコミュニケーションを図ろうとする場面が何度も見られた。

【各関係者のコメント】
・フラワーアレンジメント制作を通して、人も花と同じようにみんなで支え合いながら存在しているということを理解してもらうことができた。
・納品に来るたび、生徒さんたちの挨拶の声が大きくなってきて、表情も明るくなっている。

成果と課題

【成果】
・野菜の栽培、フラワーアレンジメント等の取組を地域と連携･協働して実践的な学習活動とすることで、生徒の経験の幅を広げることができた。
・一人一人の特性に配慮しながら、体験的な学習等を実施することで、課題解決に向けた活動とすることができた。
・専門的な知識や作業能力だけでなく、「対話力」「思考力」「表現力」といった社会性が身に付き、教育的効果がかなり高まったと感じている。

【課題等】
・地域の方々や外部関係機関と関わる中で、本校の取組に非常に協力いただいているが、お互いの思いを合わせて活動していくにはコミュニケーションがさらに必要であると感じる。双方の思いを汲み取り、方向性を同じくし、時間と場を設けて持続ある活動を行っていきたい。

体感する力、理解する力、探究する力、活用する力、共働する力

各主体の取組事例に対する定性的評価　ステップアップ・ワークシート（案）

取組事例の名称等

愛知淑徳大学
（コミュニティ・コラボレーションセンター（CCC））

ねらい

基本理念「違いを共に生きる」を体現するために、異なる価値観を認め合い、理解し合い、地域社会に貢献する。

学生の状況

新型コロナウイルス感染症の影響を大きく受けた学年もあることなど、学生一人一人が持つバックグラウンドは様々である。

成果指標

基本理念「違いを共に生きる」を体現するために、異なる価値観を認め合い、理解し合い、地域社会に貢献できたか。

■CCC の取組

1　開設科目の履修

CCC の工夫

・学生のレベルに応じて科目選択ができるように、複数の講座を開設。広い視野と行動力を身に付けることできるように地域活動へも参加。
・ステレオタイプの講義だけでなく、卒業生や NPO の方々の体験談を交えるように工夫。
・講義等で響いたものを体現するために、活動内容の立案や実施を仲間とともに実践。

見守り　共感・納得　成果実感

学生の反応

・卒業生や NPO の方々の体験談を直接聞くことで、活動の意義が心に響いた
・仲間と共に活動することで達成感ややりがいを感じた。

学生における学習の効果＆主に育まれる力

・ボランティア・社会貢献活動が奉仕活動や受動的な姿勢で取り組むものではないという認識の変化が見られるようになった。
・実際にボランティア活動等を行うことで、多様な人との出会いを通して新しい生き方を実現する行動様式であることに気づくよう促すことができた。

2　学生団体の支援

CCC の工夫

・学生自らが関心を持った社会的課題の解決に向けて、継続した活動ができるように、無理をさせ過ぎず、連携・協働先との調整をサポート。

見守り　成果実感

学生の反応

・小学生への環境学習において、伝わりやすいように表現等工夫した結果、参加した小学生から好評であったことで、やりがいを感じた。

学生における学習の効果＆主に育まれる力

・教職課程を履修していない学生も参加することで、学生同士が意見交換をしながら、多角的な視点で子どもたちへの環境学習を提供することができた。

■学生の取組

1　パスレル

コロナ禍における飲食店の休業で食品ロスに関心を持った学生が新しく立ち上げた団体。
フードドライブや子ども食堂などを中心に活動中。

学生の工夫

・団体の立ち上げに際し、フードバンク活動を行う NPO 法人などへ出向くことで、知識を増やすとともに、必要な支援ができるように準備。
・豊田市等において、子どもたちへ直接食品を届ける活動を定期的に実施することで、地域とのつながりを深める。
・大学全体にもフードバンク支援を広げたいとの思いから、売り上げの一部が名古屋市内のフードバンクへ寄附される自動販売機を設置。

見通しOK　成果実感

参加者の反応

・毎月大学生に会うことを楽しみにしている。
・小学生向けにおこなう食ロス講座では、楽しく商品ロスの状況を学ぶことができました！
・自動販売機の利用がフードバンクへの支援になることで、気軽に参加できるのがよかった。

学生における学習の効果＆主に育まれる力

・団体活動の企画立案、進行管理、ふりかえりという PDCA を実行することで、主体的な活動を実施することができた。
・各関係者と連携することで、社会とのつながりを実感し、生きた学びとなった。

２　エコのつぼみ

竹林整備とワークショップを主として活動。

NPO モリビトの会とともに美浜町で竹の伐採や竹炭作りを行うほか、ショッピングモールや小学校でのワークショップを実施。

・NPO と連携し、竹林整備として竹林の伐採、竹炭作りのほか、伐採した竹の有効活用のため、花々を育てる竹プランターのワークショップ等も実施。
・2007 年から活動を実施しているが、継続した活動とするために、学生同士でやりたいこと、挑戦したいことを明確化し、主体的に取り組めるよう留意。
・コロナ禍ではオンラインでの〇〇を行い、活動の幅を広げるように工夫。

本物体験　成果実感

・活動の大半が高齢者となっており、継続しても終わりのない状況に限界を感じる時もありましたが、若者が一緒に参加してくれることで、活動を続ける糧になりました。
・竹炭消臭 POT をつくりながら、里山保全の大切さや間伐活動について知りました。
・楽しく環境について学べました。

・自主的、継続的に活動を続けた経験から、地域課題を解決する当事者として自分を位置づけれられるようになった。

■愛知淑徳大学（コミュニティ・コラボレーションセンター（CCC））

・愛知淑徳大学は、「違いを共に生きる」という基本的な理念、さらに理念を支え、具体的に実現していくべきテーマのひとつとして、「地域に根ざし、世界に開く」を掲げている。
・CCC は、地域社会との確かな連携により、理念を実現していくために、2006 年 9 月に開設され、学生がさまざまな地域コミュニティとの交流や活動を通して、実践的な生きた知識や技術を学べるよう支援しており、現在約 30 の団体が活動している。

CCC

地域の方と田植え作業

商店街での文化交流ブース

山間地域の活性化（茶摘み作業）

学生の変容

【学生のコメント】
・誰かのために活動したいと思ったことを、様々な過程を経て実現させる中で、自らが主体的に行動するための「行動力」が大切であると気付き、この力が培われたと思う。
・様々な組織の方々と協力することで環境保全活動を続けられている。多くの出会いを積み重ねることで「対話力」「共感力」が育まれた。

【CCC のコメント】
・学生が変容していく姿と学生が地域を変化させていく姿をみながら、伴走者として、より地域によいコーディネートを意識していく。

成果と課題

【成果】
・授業内外における活動で、学生の主体性を尊重し、実践につなげることができた。
・事業者、NPO、行政等の多様な主体と連携するために、学生が積極的に関係者との調整を図るなど立場や状況に応じた役割を担うことで、地域社会への貢献につなげることができた。

【課題等】
・少子化等で地域の担い手が減少していく中、若者の必要性はより増している。学びが多い継続活動を行う若者の割合はまだまだパーセンテージが低いので、活動が必要な地域に必要なパワーとして入れる学生が増えるように促していくことを目指している。

活用する力、共働する力

各主体の取組事例に対する定性的評価　ステップアップ・ワークシート

取組事例の名称等

株式会社ダイセキ

ねらい

「環境を通じ社会に貢献する環境創造企業」として事業活動を進める。

学習者の状況

資源循環型社会の構築のために必要な情報への理解度には差がある。

成果指標

「環境を通じ社会に貢献する環境創造企業」として、事業活動ができたか。

■取組の内容（事業活動）

1　社員に対する環境教育の実施
- 月１回のコンプライアンス研修
- 階層別研修

2　環境保全の実施
- リサイクル事業
- 大気・水質環境の保全
- 災害･事故に伴う緊急工事

工夫

- 持続可能な社会の構築に向けた会社の経営戦略の実現のために社員を人的資本と捉えて、積極的な研修を実施。
- 様々な研修等の機会を捉えて、社員の環境に対する意識を高めるように工夫。

見通しOK　成果実感

- 廃油・廃液・汚泥、汚染土壌・石膏ボード等を燃料や原料等にリサイクルし、限られた資源を有効活用。
- 排出水には環境法令で定められる基準値よりも厳しい自社基準を設定し、環境負荷を低減。
- 災害・事故などによって漏えいした油や、火事発生後の消火剤などを回収し、拡散を防止して、災害・事故の復旧を実施。

見通しOK　成果実感

社員の反応

- 研修で勉強した内容を、今後の自身のキャリアアップにつなげていけるようにしたいと思います。（中堅社員）
- サーキュラーエコノミーなどについて､地球環境や社会のために､行っていく必要があることを理解しました。（管理部門社員）

中堅社員に対する研修の様子

- 社員一丸となってリサイクルに取り組む姿勢が､工場などからも高く評価されている。
- 特に災害時対応については、自治体などからの信頼につながっている。

東日本大震災時の復旧支援の様子

学習の効果＆主に育まれる力

- 事業活動と環境との関係について理解を深めることで、社会情勢の変化にも柔軟に対応できるような人材育成につなげることができた。

- 廃棄物を資源と捉え、多様な技術を組み合わせることで再資源化を行い、排出者と利用者をつなぐ役割を担っている。

■取組の内容（社外への環境学習）

1　工場見学の実施

工夫

- 様々な団体や地域住民等に対し、工場見学を実施することで、事業活動に伴う環境負荷低減に関する取組を周知。
- どんなことをやっているのか、においや色など、現場を五感で体験。
- 見学者からの意見は全社で共有するとともに、工場等の現場にも反映することで業務改善を実施。

本物体験　成果実感

参加者や社員の反応

- 工場のイメージとは異なり、きれいな施設等であることが分かり､環境に配慮していることが分かった。(参加者)
- 地域の人に自分たちが誇りを持って仕事をしていることを知ってもらえる機会だと思っている。（社員）

環境への取り組みの紹介の様子

工場見学の様子

学習の効果＆主に育まれる力

- 事業活動を理解してもらうことで、廃棄物に対するネガティブなイメージを払拭し、資源の有効活用に向けた周知ができた。

２　各主体へのセミナーの実施

・環境学を学んでいる大学生・大学院生を中心に、環境ビジネスに関するセミナーを実施。

・セミナーでは、工場見学も取り入れ、事業者が実施している取組への理解を深めるよう工夫。

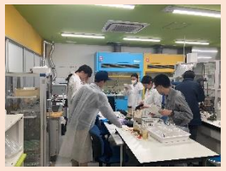
・大学プログラムへ参画し、長期インターンシップも受入。長期インターンシップでは、大学生に対し、〇〇を実施し〇〇ができるよう工夫。

本物体験　共感・納得

・企業や環境を支えている現場を見ることができて、そこで働く方々がかっこいいと感じた。（大学３年生）

・学生でありながら事業展開について考え、実際に取り組める可能性があるということについて大変嬉しく思います。（大学院生）

大学生を対象としたセミナーの様子



長期インターンシップでの実験風景

・事業者の強みを活かしたセミナーや工場見学により、大学生等への環境ビジネスの理解を深めることができた。

・長期インターンシップの受入を通じ、社員が学生に対し最新の科学的知見に触れる機会を提供することで、意見交換を行うなど、学び合うことができた。

■株式会社ダイセキ

・1945（昭和 20）年創業、1958（昭和 33）年名古屋市に会社を設立。

・設立当初から、時代に先駆け廃棄物を資源として再利用することに着眼し、焼却処理施設や最終処分場を有しない産業廃棄物の中間処理・リサイクルのパイオニアとして業界をリードしている。

リサイクル工場の様子

社会の中での役割

学習者の変容

【社員】

・環境問題に対しさらに関心を持つようになった。具体的な取組のために、何が必要か考えるようになった。

・「地域の人に自分たちが誇りを持って仕事をしていることを知ってもらえる機会だと思っている」というコメントが上に記載されていましたので、それに関連して変容を追記していただけないでしょうか。

【見学者、参加者】

・環境問題への取り組みについて、より身近に感じるとともに、関心を寄せるようになった。

【長期インターンシップ参加者】

・貴社のインターンシップ参加者における参加前後での変容を記入いただけないでしょうか。

成果と課題

【成果】

・事業活動と環境との関係について理解を深め、社会情勢の変化にも柔軟に対応できるような人材育成を進めることで、循環型社会の構築を推進することができた。

・セミナーや工場見学により、環境への理解を促すことで、持続可能な社会の発展に貢献することができた。

【課題等】

・社員への環境教育のさらなる充実

・より幅広いステークホルダーへの情報発信、業界イメージの向上に向けた取組

体感する力、活用する力、共働する力

各主体の取組事例に対する定性的評価　ステップアップ・ワークシート（案）

取組事例の名称等

特定非営利活動法人犬山里山学研究所

ねらい

大学や研究機関ではできない役割を担い、「市民がつくる里山学」形成を目指す。

学習者の状況

学習者の自然への興味・関心は、様々である。

成果指標

大学や研究機関ではできない役割を担い、「市民がつくる里山学」形成を目指すことができたか。

取組の内容	工夫	学習者（参加者）の反応	学習の効果＆主に育まれる力
1　環境講座、観察会 生物・環境講座や観察会の開催や、保全活動を行っている。	・犬山市周辺の里山における調査研究結果を活用し、環境講座や観察会等の機会を捉えて、幅広い世代に向けて里山の大切さについて発信。 ・環境講座や観察会等では、小さな変化に自ら気づくことができるよう、伝えるタイミングを工夫。 本物体験　共感・納得	・参加するたびに新たな発見があり感動します。 ・色々な生き物が採れて面白かった。 ・子供の頃よくつかまえた生き物を改めて観察できた。 ・名前がわかると興味がわいて面白い！ 	・植物や生き物などの環境講座により、身近な自然への関心を高めることができた。 ・視線・視点が変わり、今まで気が付かなかったことに気が付けるようになった。 体感　理解　共働　探究　活用
2　調査研究、展示 自然資料の収集や分析及び展示を行い、成果を広く発信している。	・旬の話題に関連した企画展示、植物の性質を活かした体験できる仕掛けづくりなど、来館者が楽しく学べるよう工夫。 ・できるだけ標本、剥製、ジオラマなど具体性と視覚性を具えた展示になるよう工夫。 本物体験　ゲーム化　共感・納得	・「生きもの探偵」やオナモミを使った「魚釣りの展示」が子供たちに大人気です。 ・魚釣りが楽しかった！ ・生き物がどんなところにいるか分かった！ ・里山の姿が模型でよく分かって良いと思います。 	・工夫を凝らした展示により、地域の自然環境に親しむ場として、実感を伴った学びを提供することができた。 ・観察、探究の中に「遊び」の要素を入れることで、親しみを増す学びの場を提供できた。 体感　理解　共働　探究　活用
3　他の主体との連携 ①小学校の総合的な学習の時間等における自然体験学習を実施している。	・生き物や植物などの様子を、匂い、音、感触などの五感を使って体験。先入観に捉われた体験にならないよう「現地で体感すること」「自分で体験すること」を大切にし、現地体験を先に行うよう、学びの順番を工夫。 ・犬山市内の小学校に対して、自然資料の収集や分析で得た知識・経験を活用し、身近な自然との触れ合いや学びを支援。 本物体験　見守り　成果実感	・春は中島池・新池周辺の自然、秋は田口大洞池・田口洞川の役割と周辺の自然、冬は里山について学び、最後に発表会・感謝の会で、これまで学んだことを発表し、お礼の手紙を渡しました。 ・校区を流れる五条川の生き物環境調査では、予想以上に生き物がいっぱいとれて、五条川ってすごいなと感じました。 	・小学生の感性を通じると、ふだん見落とすものが見えてくることを、スタッフ自身が学び直す機会になった。「忘れてしまったもの」を取り戻すには、多くの人とのつながりが大切だと再認識できた。 ・専門的な知識や経験を活かし、五感を使った体験の機会を提供することで、豊かな感性を育むきっかけとすることができた。 体感　理解　共働　探究　活用

②地域の方等とともに、ふれあいの森や水生生物園を整備している。

・地域の方等と連携しながら、里地里山の自然環境を保全するために、ふれあいの森や水生生物園を整備。
・ふれあいの森を整備する際には、森の将来像を考えながら間伐や除伐を実施。
・水生生物園の整備活動では、草が繁茂してしまわないよう除草作業を継続しており、動物や植物がこれからも生存できる場所となるよう、そして、人と自然が共生していくことができるよう、それぞれの環境に合わせた整備を実施するよう工夫。

本物体験　見守り　成果実感

・暑さ寒さが厳しい日の作業は大変ですが、仲間がいるから頑張れます。
・守るべき動物、植物があるので、何とかしようという思いを仲間と共有できる。

・里地里山の自然環境の保全を地域の方と連携して行うことで、自然との関わり方や触れ合い方を共有することができた。

■特定非営利活動法人犬山里山学研究所

・環境学習講座や観察会、標本の展示・保存、調査研究などを通して、里山に親しみながら生活する人づくりを進めている。
・平成 18 年にオープンした犬山里山学センターの受付管理を行い、収集した自然資料を常設展示や企画展示などで来館者が見られるようにしている。

犬山里山学センター

近くの小川での
水生生物調査・観察

自然体験学習講座「昆虫教室」
にてチョウの幼虫を観察

学習者（参加者）の変容

【環境講座、観察会の参加者のコメント】
・家では触れない虫や、あまり有名ではない虫もじっくり見て楽しむようになった。
・図鑑を見るようになった。
（様々なものへの好奇心と観察力向上。）

【来館者のコメント】
・生き物がどんなところにすんでいるかわかった。
・色々な工作ができてうれしい。
・見たことがない鳥や昆虫がいて感動した。
（生き物や自然に対する興味が向上。）

【小学生からの手紙より】
・お魚をとるのをいろいろな方法で教えてもらった。家で弟と一緒に教えてもらった方法で魚を捕まえてみた。
（教えてもらったことを家で実践することから、反復学習や他者への共有が見られる。）

成果と課題

【成果】
・犬山市周辺の里山の調査研究を活用し、地域の環境学習の場として実感を伴った学びを提供することができた。
・小学校等への自然体験学習では、学校ではできない五感を使った体験により、子どもたちに豊かな感性を育むきっかけとすることができた。
・「学び」、「実践」、「伝承」が一体となって初めて自然財産を守っていけることを再確認できた。
・生物や環境の見方、関わり方の多様な価値観をどのように包括していくべきかを考える機会となった。

【課題等】
・話の運び方などで子供たちに先入観を持たせてしまう可能性があるため、伝え方などの難しさを実感した。それらも含め毎回の反省会で、お互い気が付いたことを共有し、補い合うことが大切である。
・ボランティアスタッフの高齢化に伴い、人員の確保等が課題となる。

小学校から寄せられた自然体験学習へのコメントのご紹介

▌犬山市立城東小学校

【児童のコメント】
・野鳥の写真を見せてもらって、こんなにたくさんの野鳥が中島池に来ていたことに驚きました。でも、自然破壊によって、野鳥が減っていると聞いて残念です。私はエコ用紙を使って、自然を守りたいと思いました。
・アメリカザリガニ等の外来種が在来種を減らしていることを知りました。外来種のペットは最後まで責任をもって飼います。皆にも呼びかけたいです。
・城東の里山の自然は地域のボランティアの方々の活動のおかげで守られていると気付きました。私もボランティアに参加したいと思いました。

【先生のコメント】
・児童は実際に昆虫や植物を見たり、写真や標本を見せてもらったりして、城東の里山が自然豊かな地域であることに気付きました。しかし、年々その自然が減少していることを知り、自分たちにできる活動をしたいという思いを持ちました。ポスターやチラシ製作して環境を守るよう校内で呼び掛けたり、中島池・田口洞川のごみ拾い等の活動を行ったりしました。

▌犬山市立羽黒小学校

【児童のコメント】
・タモロコがとれたことがうれしかったです。でも、一番たくさんとれたのはアメリカザリガニでした。外来種をどうしたら減らしていけるか勉強したいです。

【先生のコメント】
・毎年継続して行っている生き物調査から、徐々に五条川の環境がよくなってきていることに子どもたちは気付きました。今後も羽黒小学校のみんなで五条川の環境をよくしていきたいと子どもたちは考えるようになりました。

共働する力

各主体の取組事例に対する定性的評価　ステップアップ・ワークシート（案）

取組事例の名称等

刈谷市立双葉小学校 PTA・地域学校協働活動

ねらい

地域、家庭、学校が一体となって、子どもたちの健やかな成長を見守る。

児童の状況

授業、給食、課外活動等で新たなことを学ぶ際には、児童は不安と期待が入り交じっている。

成果指標

地域、家庭、学校が一体となって、子どもたちの健やかな成長を見守ることができたか。

取組の内容

1　PTA 等の活動
- 校内の除草作業、苗植え
- あいさつ運動
- リユース品販売
- 教室の扇風機の清掃
- 広報活動

工夫

- 保護者、地域の方が校内の除草作業や苗植えを実施することで、子どもたちが気持ちよく生活でき、季節を感じることのできる場所を創出。
- あいさつ運動をしながら、子どもたちの様子を地域ぐるみで見守り。
- 各家庭から集まった学用品のリユース品販売を行い、家庭でも学校でも物を大切にすることを通して、限りある資源を有効に使うよう工夫。
- 保護者、地域の方が教室の扇風機を清掃することで、子どもたちが気持ちよく生活できるようにサポート。
- PTA やおやじの会の活動について、おたよりを配付して多くの方の参加を呼びかけている。PTA 新聞には、写真や活動してくれた方の声を掲載し、活動の様子が分かりやすくなるように工夫。

見守り　本物体験　成果実感

児童や関係者の反応

- 教職員、児童から美しい環境になったことを喜ぶ声や感謝の声があった。
- 保護者、教職員は、子どもたちのために、多くの活動をしてくれていることに感謝している。
- PTA の方と一緒に植えた苗が大きく育ち、きれいな花を咲かせてほしい。

学習の効果＆主に育まれる力

- 学校の整備等を通して、児童や関係者が世代を超えて交流することができた。子どもが自然に親しんだり、美しい環境で過ごしたりすることができた。
- 広報活動をすることで、学校、PTA が一体となって、児童の学びや成長を支えていることを周知することができた。

2　地域学校協働活動
- 双葉ガーデン（中庭ガーデン）の整備
- 授業活動の補助

- 地域学校協働活動コーディネーターが学校と学校サポーター（PTA 会員の保護者、地域の方）と連携しながら、児童の学習活動を支援。
- 保護者、地域の方、児童が一緒に中庭の整備を実施することで、思い入れのある憩いの場にするとともに、世代間の交流の機会を提供。また、四季折々の植物を育てることで、生き物が集まるような場所にもなり、自然に親しむ機会を創出。
- 第１学年の給食の配膳や、第５・６学年の家庭科の調理実習の補助を通して、食育推進となるように工夫。

見守り　見通しOK

- 双葉ガーデンを整備した方々は、子どもたちの憩いの場となり、自分たちも楽しめる場となることを願っている。
- 子どもたちは、双葉ガーデンで四季折々の植物にくる生き物を見つけ、楽しんでいる。整備した方が、双葉ガーデンで育った植物でリースなどを作り、子どもたちは、その飾りを見て自然のすばらしさを感じている。

- 地域学校協働活動として、児童を補助することで、きめ細やかな学習につなげることができた。
- 家庭や地域での学び合い、育ち合いのきっかけとなった。

・教職員、保護者からは、多くの方が学校サポーターとして子どもを見守り、子どもたちの成長を感じてくれるので、ありがたいとの声があった。

・地域の方は、子どもたちの取組への真剣さや成長を喜んでいる。

・児童は、スムーズに活動を進めることができて感謝している。また、活動に困ったら優しく教えてくれ、できるようになるので、うれしいと思っている。

■刈谷市立双葉小学校 PTA・地域学校協働活動

・PTA の主な活動としては、環境の保全・美化、防災、防犯・交通安全、広報活動等であり、地域、学校、家庭をつなぐ役割を担っている。
・令和４年度から刈谷市で始まった「地域学校協働活動」のモデル校として、地域、学校が一体となって活動している。
・地域学校協働活動コーディネーター２名が、学校と学校サポーター（保護者、地域の方）との架け橋となり、学校活動を連携・協働して進めるように取り組んでいる。
・学校サポーターは、第１学年給食配膳補助、第５・６学年家庭科授業補助などを実施している。
・PTA、おやじの会、地域学校協働活動（コーディネーター、学校サポーター）、地域団体（パトロール隊、保全会、JA など）、ボランティア団体などが、児童の見守りや学校運営のサポートを行っている。

PTA による苗植え

ミシンサポート

児童や関係者の変容

【児童のコメント】
・PTA の方と一緒に植えた苗が大きく育ち、きれいな花を咲かせてほしい。

【先生のコメント】
・子どもたちは、困ったときに、助けてほしいと伝えられるようになった。

【PTA のコメント】
・活動を通して、子どもたちの様子をよく見ることができるようになった。

【地域学校協働活動コーディネーターのコメント】
・多くの人が、子どものためによりよい支援をし、子どもたちの成長も見ることができるようになった。

【学校サポーターのコメント】
・子どもたちが活動に真剣に取り組む姿や成長していく姿を見ることができてうれしかった。

成果と課題

【成果】
・PTA や地域学校協働活動を通して、地域、学校、保護者等が一体となって、児童の学びや成長を支えることができた。
・学校が、児童、地域の方、保護者がともに学び合う場となり、世代間の学び合い、育ち合いにつなげることができた。

【課題等】
・現状としては、それぞれの団体が、別で活動している。子どもたちのためという思いは一緒なので、一体化するといい。

体感する力、活用する力、共働する力

各主体の取組事例に対する定性的評価　ステップアップ・ワークシート（案）

取組事例の名称等
大府市
（大府市環境パートナーシップ）

ねらい

一人ひとりが自分のこととして環境を意識し、学び、気づき、そして行動する市民を育む。

市民の状況

パートナーシップのメンバーが実施している環境保全活動等の参加者である市民の環境に対する理解度には幅がある。

成果指標

一人ひとりが自分のこととして環境を意識し、学び、気づき、そして行動する市民を育むことができたか。

■市の取組

大府市環境パートナーシップ会議の開催
（年２回程度）
メンバーからの提案、活動実績報告及び意見交換

市の工夫

・2019（令和元）年度に、従来までの行政主導で行う会議形式から、メンバー同士が課題・提案を持ち寄り、その解決に向けた意見交換ができる場へと方向転換。
・各主体が連携・協働し、意見交換をしやすい環境にするため、オープンスペースで会議を開催。メンバー同士が互いを尊重し合うためのルールを説明。

見通しOK　共感・納得　成果実感

メンバーの反応

・提案や課題に対して、質問や助言等の活発な意見交換があった。
・難しい課題にも、解決に向けた類似例などが挙げられるなど、前向きな議論であった。

学習の効果＆主に育まれる力

・各メンバーが持つ専門的な知識や経験を活かし合うことができた。
・メンバー同士が会議を通して、連携・協働先を見つけることができた。

■メンバーの取組

活動事例１
（株）豊田自動織機　長草工場
①水槽展示
②松ぼっくり等のプレゼント

メンバーの工夫

①地元の河川で捕獲した生き物等を水槽で飼育し、保育園や小学校等へ貸出。至学館大学の学生に社会活動の一つの場として参画してもらい、全体企画、魚の捕獲、手紙のやり取り、ミニ観察会、魚タッチイベント等を協働で実施。
②工場でとれた松ぼっくりは焼却処分をしていたが、有効活用するために、大府市内の保育園等へ松ぼっくりや松ぼっくりを使った作品をプレゼント。子どもたちに自然の恵みを通した自然とのふれあいの機会を提供。

本物体験　驚き・感動　見守り

市民の反応

①保育園や小学校等から届く手紙には、「魚が好きになった」「生き物のことをもっと知りたくなった」などの声があった。魚タッチイベントで園児たちが大興奮した。
②園児たちは目を輝かせながら笑顔で松ぼっくりに色や飾り付けを行った。多くの笑顔があふれた。

学習の効果＆主に育まれる力

①子どもたちとの手紙のやりとり・ミニ観察会を通して生き物への興味を高めてもらった。学生も教育体験ができた。魚に触れることで命の大切さを実感できた。
②子どもたちが松ぼっくりを使って工作をすることで、身近な自然を感じることができた。

活動事例２
子育て支援サークルあそびのいっぽ
①フードドライブによる生活困窮家庭への食品支援
②アダプトプログラムへの参加
③子どもたちへの体験活動の場を提供

メンバーの工夫

①フードドライブの実施等により集めた食品を、子育て中の生活困窮家庭への食品支援。
②事務所の花壇で四季折々の植物を育てるアダプトプログラムへ参加。
③子どもたちが楽しく参加できるような、じゃがいも収穫体験、竹水鉄砲作りなどの体験活動の場を提供。

成果実感　本物体験

市民の反応

①子どもだけではなく、親の分も支援することで、家族で食について学ぶきっかけとなった。
②近隣の方から「花壇の前を通ると気持ちが温まる。ありがとう」など声をかけられるようになった。
③ノコギリ・キリなどを使い、自分で竹水鉄砲を作ることができ、子どもたちがとても喜んでいた。親も「子どものあんな楽しそうな顔を見たのは久しぶり」と喜んでいた。

学習の効果＆主に育まれる力

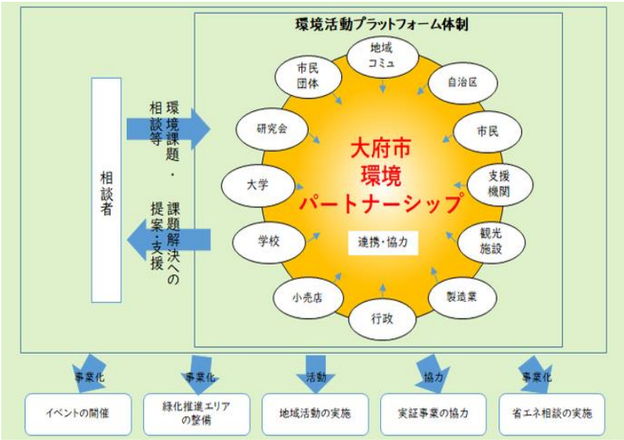
①フードドライブの実施を通して、地域のためにできることを子どもたちが考えるきっかけとなった。
②四季折々の植物を育てることを通して、季節の変化を感じることで、自然に親しんでもらうことができた。
③一人親家庭の子は体験活動の機会が少ないので、体験活動を通じて視野を広げることができた。また、環境を学ぶ機会を提供することで、地域の連携・協働につなげることができた。

■大府市（大府市環境パートナーシップ）

・市民団体・地域コミュニティ・事業者など、環境づくりに関心のある地域に密着したプレイヤーの組織として 2003（平成 15）年度に発足した「環境活動プラットフォーム」。

・地域の環境課題等の解決に向けて、連携・協力して活動を実施。

・環境パートナーシップ会議において提案のあった事業を中心に、環境パートナーシップ会議参加者の協力のもとそれぞれ活動を進めている。



各関係者の変容

【パートナーシップ】

［大府市のコメント］

・環境パートナーシップ会議の形式を変更してから、メンバー同士の交流が活発になり、環境学習等を実施できる環境づくりができた。

・他自治体からもパートナーシップの運営等についての問い合わせがあるなど、行政のメリットを活かす取組となった。

［メンバーのコメント］

・行政の持つ「信用力」「紹介力」「情報力」「発信力」を活用することができ、他団体との関係の構築がしやすかった。

【メンバーが実施した取組】

［参加者のコメント］

・保育園や小学校等から届く手紙には、「魚が好きになった」「生き物のことをもっと知りたくなった」などの声があった。

［メンバーのコメント］

・高校生までの家族を対象に食品支援を実施しているが、子どもから高校卒業前に勇気を持って自立したので、他者の支援をしてほしいという申し出があった事例が、支援者として嬉しかった。

成果と課題

【成果】

・会議形式を変えたことで、パートナーシップ会議のメンバーが主体的に環境保全活動等に取り組むことができるようになった。

・地域の環境課題の解決に向けて、多様な主体が自らの強みを活かし合いながら連携・協働することができた。

【課題】

・本プラットフォームに参加していただける新たなプレイヤーの発掘